

日中関係史の空白を埋める貴重な資料——王雪萍編著『戦後日中関係と廖承志——中国の知日派と対日政策』（慶應義塾大学出版会）

（工学院大学孔子学院学院長）西園寺 一晃

いわゆる歴史認識問題について、私は近現代の日中関係史の中では、主に2つの歴史的段階が対象になると思う。1つは当然のことながら、日本軍国主義の中国侵略の歴史である。もう1つの歴史段階は1949年から1972年の23年間である。中華人民共和国が誕生し、そこから新たな、そして複雑な日中関係が始まったが、この23年間の日中関係史について、日本人の多くは知らない。これは中国とて同じである。私は時々中国の大学で講義をする機会がある。中国の大学生は、日中戦争の歴史はよく知っている。しかし、多くの学生の日中関係に関する認識は、日中戦争が終わると次は1972年の国交正常化なのである。つまり1949年-1972年の23年間がすっぱり抜けているのだ。この23年間の日中関係史については、学術的にも確立していない。貿易、人事交流、政党交流など個々の問題についての研究はあるが、この歴史的段階総体の研究は少なく、その意味では2000年の日中関係史の中では「空白」と言っても過言ではない。

本書はこの「空白」を埋める好書であり、貴重な資料でもある。この時期、中国の対日政策はどのように形成されてきたのか、当事者はほとんどが亡くなってしまっているが、周恩来-廖承志ラインの下で仕事をしてきた人たちの一部はなお健在だ。その人たちの証言を含め、本書はこの「空白」を埋める上で大変貴重だ。

この段階の日中関係史に関わった日中両国の、各分野の人は多い。しかし全体を把握し、この時代の日中関係を動かしたのは周恩来であろう。本書は廖承志に焦点を当てて、この23年間の日中関係史の動きを追い、解説しているが、真の主演は周恩来である。廖承志は周恩来の命を受け、周

来の直接指導の下で、具体的に日中関係を動かした重要人物である。

1958年のある日、私は周恩来から直接次のような話を聞いた。「中国が対日正常化を決めたのは1950年代初頭である」と周恩来は言い、次のような話をしてくれた。当時日中正常化には障害が2つあった。1つは相手のあることで、日本政府が応じるかどうかである。冷戦の最中、日米関係を考えると、日本を説得するのは至難の業である。もう1つは国内の民衆感情だった。当時は抗日戦争が終わってまだ時間がたっておらず、民衆の中には日本に対する激しい憎しみが渦巻いていた。「中国民衆の中にこのような感情がある以上、対日正常化は難しい」と周恩来は言い、「唯一の方法は、一部の軍国主義者と日本の国民を分けることであり、国民同士は敵ではなく、仲良くしなければならぬと、中国の民衆を説得、教育することだ」と述べた。

中国の民衆に対する説得、教育は中国共産党、政府を挙げて行われた。同時に、正常化のための対日工作は毛沢東-周恩来-廖承志ラインで行われることになった。具体的に廖承志が対日工作の責任者として任命されたのは1952年と言われる。本書では、周恩来の下で廖承志がどのような対日工作を展開したかについて、当時廖承志を補佐して対日工作に携わった人たちの証言を交えて、かなりの部分が明らかにされている。

当初、周恩来が目指したのは日本政府との直接交渉だった。そのための日本へのシグナルとして中国残留邦人の帰国援助、日本人戦犯・捕虜の恩赦と釈放を行い、周恩来自身が2度にわたり日本政府に呼びかけ、ジュネーブの中国総領事が2回、日本総領事に書簡を送った。これは1950年代の出来事だ。この間には1956年の鳩山一郎内閣による対ソ国交正常化があり、翌年には日中国交正常化早期実現を公約に掲げる石橋湛山内閣が発足した。周恩来-廖承志ラインは「時は熟しつつあ

る」と思ったに違いない。ところが予期せぬことが起こる。石橋が病気で倒れ、代わって登場したのは対中強硬派、台湾派の岸信介内閣であった。岸は首相になると台湾に赴き、国民党政府の「大陸反攻」を公然と支持した（57年6月）。更に同じ時期に「劉連仁事件」（58年2月）と「長崎国旗事件」（同年5月）が起き、日本政府の対応に中国は激怒する。細々と続いていた貿易関係、民間交流は全面的にストップした。中国は対日戦略の転換を迫られることになる。当時日中関係に台湾がどう絡んだのかも、本書ではかなり詳しく言及されている。

60年代の対日政策をどう見るかは大きな問題であろう。一つの見方は、周恩来が「対日政府間直接対話」方式を一旦諦めて、「急がば回れ」方式、つまり「民間交流積み上げ」方式中心に戦略転換したという見方である。もう一つの見方は、周恩来は「民間外交」の限界を十分心得ていて、あくまで政府間直接交渉を目指した。その証拠に、日中貿易を半官半民の「L・T貿易」へ押し上げ、正常化のテコとしたという見方だ。本書は民間貿易については詳しく触れているが、残念ながら「民間交流積み上げ方式」全体の言及、分析は弱い。いずれにせよ、廖承志は周恩来の指導の下で、政府間交渉を睨みながら、幅広く日本の民間に交流の促進を働きかけ、大きな成功を収めた。これは周恩来の威信と、廖承志の人柄、日本語の巧みさと日本における幅広い人脈の賜物であり、他の人には真似の出来ないことであった。

しかし、廖承志1人で対日工作が出来たわけではない。廖承志の下には有能な部下が大勢いた。廖承志は中国の多くの機関と関係を持っていて、広く人材を活用できたからである。國務院外弁、外交部、外交学会、和平委員会、中聯部、対友協・中日友協、国貿促、共青団、総工会、婦聯、僑弁など。つまり、本書でも指摘しているように、当時の対日工作は、周恩来を頂点に、廖承志を総責

任者にした「統一司令部」があり、広く人材を集めたチームが出来ていたのである。なお、忘れてはならないのが陳毅と郭沫若である。陳毅は周恩来の最も信頼する部下の1人で、周を補佐して外交全般を統括していた、いわば廖承志の上司である。対日工作にも深くかかわっていた。郭沫若は周恩来の信任が厚く、廖承志も先輩として尊敬していた知日派である。郭沫若は対日工作統一司令部の顧問的存在であった。本書には廖承志の側近として「四大金剛」が出てくる。趙安博、王曉雲、孫平化、肖向前である。当時は廖承志を支える「三羽鳥」という言葉もあった。趙安博以外の3人である。この3人と趙安博の役割は少し違ったように思う。趙安博は中聯部所属で、主に日共との関係を担っていた。趙安博の上には張香山がいて、下には劉遅らがいた。「三羽鳥」は主に日共以外の政党、民間団体に対する工作を担っていた。

本書は大変な力作で、内容は実に豊富であり、当時の日中関係と中国の対日認識を知り、そして対日戦略、対日政策がいかに形成されたかを知る上で貴重である。日中関係の研究者、日中関係に興味のある人の必読書である。ただ1つだけ残念に思うのは、背景としての、当時の国際情勢の描き方が弱いと思う。時は正に冷戦の真只中であり、日中関係は米ソ対立、中ソ対立、米中对立、その後の米中和解の中で醸成されてきたのである。中国の対米、対ソ戦略が日中関係に決定的影響を及ぼしている。朝鮮戦争、キューバ危機、ベトナム戦争、中ソ論争と中ソ決裂の中で日中関係は翻弄され、そして醸成された。

日中の著者に敬意を表すとともに、本書の出版を契機に、1945年-1972年の日中関係史の研究がさらに進むことを希望する。

（2013年9月刊、400ページ、本体4,200円+税）